

デジタル写真が危ない

[村田 和彦](#)

2002 年にデジカメの生産台数が初めてフィルムカメラを上回り、その後もその伸びはさまざま、現在ではカメラの生産台数のほとんどがデジカメとなっている。これに伴い京セラの CONTAX 事業の終了、コニカ・ミノルタのカメラ部門からの撤退、富士写真フィルムの富士フィルムへの事業継承、そして松下電器、ソニーなど電器メーカーの参入など写真業界も大きく変動している。

このように写真はその利便性から急速にデジタル化されているが、別の観点から考えてみる。写真には大きく分けて創造と記録という 2 面がある。

創造という面から考えるとカメラは単なる道具でありフィルムカメラ、デジカメどちらでも同じである。むしろデジカメのデジタルデータではレタッチ（写真に手を加えて加工する）が容易であり、フィルムに比し創造範囲がより広がっていると言える。

もう一方の記録の面に関していえば、まず保存性が大事である。保存という面ではデジカメの写真は大変脆弱であり、コピーも簡単であるが、誤操作による抹消も一瞬である。またデジカメ写真では従来のように単にフィルムを保存すればよいのとは訳が違い、その保存にはシステムを含めて考えなければならない。すなわちビューア（写真を見るソフト）、レタッチなどのアプリケーションソフトおよびそれらを動かす OS、コンピュータ本体などが必要である。しかも、これらハード、ソフトは陳腐化が非常に早く更新していかなければならない。

さらにはメディアでの保管を考えるとフロッピーから今では CD、DVD に更には次世代 DVD とこちらでも進歩が激しい。

またデータフォーマットについても考えておく必要がある。現時点では多くのデジカメが JPEG をデータフォーマットとして採用しており、事実上のデファクトスタンダードとなっている。しかしこの JPEG も今後とも標準である保障はない。現にマイクロソフト社は、新 OS（Windows VISTA）の発売と共に JPEG の後継フォーマットとして WMP（Windows Media Photo）という新しいフォーマットを提唱している。

これらメディア、データフォーマットの進化にも追従していく必要がある。

写真においてもデジタル化のメリットは多く、フィルムに戻ることはないが保存を考えた時はそれなりの配慮が必要である。即ちデジカメ写真のデータには、フィルムのような物理的な劣化はないが、それを可視化するためのハード、ソフトの陳腐化が速いことである。データそのものを保存するだけでなく、システムとしての対応が必要である。特に個人で写真データの保存を考えた時には大きな負担である。

注；OS とはパソコンの応用ソフト（Word、Excel など）を動作させる基本ソフトである。